

明治維新の文学

——山の大河小説の視点から——

平山 令二

- I 島崎藤村『夜明け前』——明治維新の批判——
- II 中里介山『大菩薩峠』——明治維新の解体——
- III 江馬修『山の民』——明治維新における幻のユートピア——
- IV 山から見る明治維新

明治維新を扱った文学作品は多く、興味を持って私もそれらの作品を読んできた。読んでいるうちに「山の大河小説」とでも称すべき一連の長編小説があることに気づくようになった。具体的には、島崎藤村『夜明け前』（1929-35）、中里介山『大菩薩峠』（1913-41）、江馬修『山の民』（1938-40）の3作品である。

ただし、これらの3作品の基本構造は異なっている。『夜明け前』は本格的な歴史小説、『大菩薩峠』は大衆小説（ただし介山自身は、大衆小説ではない、と言っていた）、そして『山の民』はプロレタリア小説と分類される。また、明治維新を扱っているといっても、『夜明け前』こそ幕末、明治維新、その後という3つの時代を対象にしているが、『大菩薩峠』は明治維新以前を対象とし、『山の民』は明治維新以後を対象にしている、対象とする時代もずれている。3作品のこのような違いは根本的なものと呼べるかもしれない。しかし、以下に述べていくように重要な共通点が見られる。この3作品を「山の大河小説」としてまとめて論じるゆえんである。まず先入観なく3作品を具体的に見ていこう。

I 島崎藤村『夜明け前』——明治維新の批判——

1. 『夜明け前』という題名について

私見では、『夜明け前』は日本近代文学の産んだ最高傑作である。もちろん、近代文学には漱石や鷗外といった巨匠がいるのだが、文学作品としては『夜明け前』がやはり最高傑作であると思う。なぜならば、日本の近代化へのターニングポイントになった明治維新を真正面から描き、しかもその深部に潜む問題にいたるまで描き切っているからである。

さて、『夜明け前』という作品を何度か読んでいるうちに、題名についての疑問がわいてきた。なぜ、「夜明け前」なのかという。この作品は、幕末、明治維新、その後という3つの連続する時代を、信州馬籠の庄屋である青山家3代の歴史と重ねて描いた長編小説であるが、「夜明け」とは通常、封建的な幕藩体制から近代国家への転機となった明治維新を象徴するイメージである。「夜明け前」はしたがって、幕末という時代を本来表さなければならないはずだ。ところが、明治維新とその後も含んでいるこの作品全体が「夜明け前」という題名でおおわれている。これでは明治維新が成功したとしても「夜明け」はまだ来ていない、という意味になってしまう。この題名をつけたときに、藤村のなかには無意識にせよ明治維新への疑問の気持ちがあったと思わざるを得ない。

藤村の明治維新への疑問は、この作品を読んでわかるように、明治維新のふたつのスローガンに関係するものであった。ひとつは「古代の復興」であり、他のひとつは「四民平等」である。しかしながら、『夜明け前』に詳しく書かれているように、このふたつのスローガンが実現することはなかった。古代の復興は、形式的な天皇親政こそ実現されたものの、廃仏毀釈を経ても全ての国民に行きわたる神道の復興は実現しなかった。その理由としてあげられるのは、神道の教義が庶民に根づいていた仏教や、開国により押し寄せてきたキリスト教の持つ体系性にかなわなかったからで

ある。また、四民平等もスローガンだけで、実際のところ庶民は幕藩時代よりも苦しい暮らしを強いられた。このことも作品中で木曾の人々の暮らしの変化として明確に書き込まれている。

2. 『夜明け前』が執筆された時代

『夜明け前』という作品を真に理解するためには、藤村がこの作品を執筆した時代に目を向けなければならないだろう。『夜明け前』が連載されたのは、昭和4年から10年であったが、この時代はどのような時代だったのだろうか。昭和3年には張作霖が関東軍により謀殺されている。昭和4年には労農党の代議士、山本宣治が治安維持法について国会で政府を追及する前夜に暗殺されている。昭和7年には日本の傀儡国家の満州国が建国宣言をしている。同年には5.15事件も起きている。さらに、昭和8年に日本は国際連盟を脱退し、昭和11年には2.26事件が起きている。

このように見てくると、『夜明け前』が執筆された時代は、大日本帝国が中国大陸への侵略を進めることで国際的孤立を深め、その裏面として国内の異論を弾圧し、軍国主義体制を強化していった時代であることが分かる。執筆者の藤村にも、そのような国内外の激動への危機意識があったことは間違いない。身边にもその余波が押し寄せていた。藤村の息子である霧助は画家としてプロレタリア美術運動に参加して逮捕された。息子の身の安全を確保のために、藤村は霧助をヨーロッパ留学という名目で一時的に「亡命」させている。藤村の身近にも時代の暗流がひたひたと押し寄せ、またそれに抗しようとする若者がいたわけである。

3. 舞台としての木曾

『夜明け前』には馬籠の庄屋である青山家の3世代が登場する。主人公の青山半蔵は藤村の父、島崎正樹がモデルである。作品中では半蔵の父、吉左衛門は江戸時代を象徴し、半蔵は明治維新、そして藤村自身がモデルの和助ら半蔵の子どもたちは明治の時代を象徴している。青山家3代が体

験するエピソードは、3つの時代の特徴を的確に表している。

吉左衛門のエピソードについては、芭蕉の句塚建立の顛末や小鳥の大食い競争など、おおらかだった江戸時代を表している。他方、半蔵については、幕末の黒船見物の衝撃や、維新後に外国の影響排除を求め決行した天皇への直訴、といった劇的なエピソードが積み重なる。半蔵は明治の近代化への不満と怒りにより精神のバランスを失い、菩提寺に放火し座敷牢に押し込められ狂死する。孫の和助は兄と上京し、英学校への進学を希望するようになる。

この作品の舞台は馬籠という片田舎である。しかし、片田舎とは今日の視点からの評価であり、馬籠という中山道の宿場町は、幕末において歴史の大きな転換の舞台となった。江戸時代に江戸と京都を結ぶ大動脈は東海道であったが、幕末の動乱期には浪士や強盗が出没し、危険な街道になっていた。そのため、比較的安全だった中山道が重要な旅程に使われる頻度が高まった。『夜明け前』に出てくるのは孝明天皇の妹、和宮の將軍家茂への降嫁行列や、水戸天狗党の西への逃避行などである。いずれも、日本の命運を決する重要な旅程である。

木曾の地は山岳地帯のため稲作はほとんどできない。それゆえ、「木曾路はすべて森の中である」という冒頭そのままに、生活のための重要な資源は木材である。なかでも大切に保護されたのは、檜などの「木曾五木」であった。木曾を支配する尾張藩は、山を明山、巢山、留山の3種類に分けて管理していた。そのうち、巢山と留山には入山禁止の措置がとられていたが、明山には庶民も自由に入山することができた。ところが、明治維新になってからは、木曾五木の成長する地はすべて官有地にされ、庶民の入山は禁止されてしまった。「山林事件」という名称で知られるこの厳しい措置は、維新政府の「四民平等」というスローガンを素朴に信じていた半蔵にとって、幻滅以外のなにもものでもなかった。

4. 幕末の動揺

1853年、ペリー提督の率いるアメリカの黒船4隻が突如浦賀沖に出現し、幕府に強引に開国を求めたことは、太平の日本を揺るがす大事件であった。その折に幕府が見せた弱腰な外交姿勢により、幕府の威信は著しく低下し、これまで形式的権威にすぎなかった天皇の存在がにわかに実質的権威として捉えられるようになった。尊王攘夷の急先鋒であった薩摩と長州はそれぞれ西欧列強との戦争に破れると、開国に急旋回して、倒幕へと舵を切った。このような歴史の大きな転換は、個々人の上にも大きな影を投げ掛けた。例えば、半蔵の国学の師匠である中津川の宮川寛斎は、激動の時代に揺らぎ始めた自らの生活基盤を固めるため、生糸商人の手先となり横浜に滞在し、異人相手に生糸の取引をする。師匠の思いもかけぬ転向に半蔵たち弟子たちは驚き、幻滅するのだった。

さて、半蔵らが信奉する平田篤胤の創始した平田国学とは、そもそものような思想なのだろうか。国学といえば、賀茂真淵に始まり本居宣長が大成したとされるが、幕末の激動期に成立した平田国学は、本居宣長の国学と内実がかなり異なっている。本居宣長の国学は、文化主義とでも言うべきもので、現実の政治や庶民の生活にそれほど関心を持たなかった。これに対して、平田篤胤は、激動期の現実政治や庶民の生活に強い関心を抱いていた。平田国学は文化の領域にとどまるのではなく、政治の領域にも関与して、天皇親政の古代政治の復興を目指した。また、激動する情勢に対応しきれず精神的に不安を抱くことが多くなった庶民の心の救済を目指し、来世に対する観念が希薄だった国学に、キリスト教の影響のもとで来世での審判といった新しい来世観を創造したのだった。

しかし、平田国学による国作りを進めようと明治政府が設置した教部省は失敗してしまう。半蔵も教部省の役人となるが、そこでの仕事は幻滅の連続だった。そもそも、庶民の間にはすでに長い期間をかけて仏教が浸透していたのだから、神道を上から押しつけようとしても、なぜ仏教から神道に信仰を変えなければならないのかについて庶民の理解は深まらなかつ

た。したがって、教部省の仕事は、神社の統合や寺の分離などの形式的な事務仕事になり、同僚たちの多くも、仕事の無意味さのために当初の意欲を失ってしまっている。

天皇直訴事件もあり、結局、半蔵は飛騨の水無神社の神官として体よく左遷される。その地で半蔵は大人、子どもを問わず熱心に平田神道の神髓を伝えようと努力するが、庶民には、半蔵の言っていることが理解されない。飛騨で4年余りを過ごして、失意を抱き馬籠に帰ってきた半蔵は、次のような認識を持たずにはいられない。

「復古の道は絶えて、平田一門すでに破滅した。」

それを考えると、深い悲しみが彼の胸に湧き上がる。古代の人に見えるようなあの素直な心はもう一度この世に求められないものか、どうかして自分らはあの出発点に帰りたい、もう一度この世を見直したいとは、篤胤歿後の門人一同が願いであって、そこから国学者らの一切の運動ともなったのであるが、過ぐる年月の間の種々の苦い経験は彼一個の失敗にとどまらないように見えて来た。(第2部第13章)

半蔵のこのような感慨とは別に、幕末、維新の時代は民衆のなかに自らの暮らしを守ろうとする運動が沸き上がった時代でもあった。『夜明け前』にも、そのような民衆運動の姿が描かれている。幕末において、「牛方騒動」が木曾に発生している。牛方とは、牛を使った運搬人のことだが、その立場は弱かった。牛方は中津川の間屋に雇われているが、立場が強い間屋に賃金を安く押さえられても、黙って従うしか仕方がなかった。ところが、幕末の動乱により民衆のエネルギー全般も高まるにつれ、牛方の間にもあこぎな間屋に対する怒りが高まった。リーダーが登場することにより、牛方の怒りは方向性を持つようになり、今でいうストライキ、つまり物資の運搬の中止にまでいたる。これにより、立場の一定の改善が図られるが、最後にはリーダーが排除されてしまい、不十分な結果になる。

先に触れた「山林事件」も明治維新による民衆の自覚に基づく運動がきっかけだった。半蔵も含む木曾谷33ヶ村の総代15名が連署して名古屋県福島出張所に差し出した嘆願書には、木曾五木という「御停止木」の見返りだった尾張藩の補助制度が廃止されたのに伴い、「御停止木」そのものも享保以前のように廃止してもらいたい、という切実な要望が書かれていた。ところが木曾を新たに管轄することになった筑摩県からは、五木の解禁はもっての他であり、官木のあるところはすべて官有地である、と尾張藩時代よりも厳しい通達が下された。森林に依存する他ない木曾谷の民衆はそれでも嘆願を止めず、ほとんどの家で腰縄付きの逮捕者が続出した。半蔵も奔走するが、福島支庁に呼び出されて、あっさりと戸長の免職を言い渡される。呆然として帰路を歩む半蔵は「御一新がこんなことでいいのか」(第2部第8章)と独り言をつぶやく。

「四民平等」や「古代の復興」が単なるスローガンに過ぎないことを半蔵は痛いほど知るのである。

5. 変わらぬ座標軸としての常民

『夜明け前』の主人公である青山半蔵は、精神的な起伏が激しい人物として描かれている。幕末、維新の日本全土の動揺と共振するかのようには、半蔵は希望と絶望の大きな波に揺れ動く。しかし他方、『夜明け前』には半蔵の対極のように時代の大きな動揺にもかかわらず、どっしりと動かない人物たち、常民も登場する。

まず、半蔵の妻であるお民の兄、寿平次である。寿平次は妻籠の本陣の当主であり、半蔵よりも年下なのだが、常に冷静な判断力で半蔵に対する。平田国学に凝り固まった半蔵に対し、寿平次は「半蔵さん、攘夷なんていうことは、君の話によく出る『漢ごころ』ですよ。外国を夷狄の国と考えて無暗に排斥するのは、やっぱり唐土から教わったことじゃありませんか。」(第1部第5章)とずばっと言い切る。本来の日本人は外国人の排斥をしていたのではなく、隔てなく受け入れていたのであり、攘夷という思

想はむしろ外国から導入されたイデオロギーだ、と言い切るのである。次に印象に残るのは、半蔵が江戸で長期下宿した商家の女房、お隅である。彼女はてきぱきと物事を進める能力に長けているだけでなく、肝が座った女性であり、18歳のときに若侍が禁酒令にもかかわらず酒をせびりに来て刀を抜いて畳に突き刺しても、びくもしない。「当時の武士でないものは人間でないような封建社会に、従順ではあるが決して屈してはいない町人をそう遠いところに求めるまでもなく、高い権威ぐらい畏れないものは半蔵の直ぐ側にもいた。背は高く、色は白く、眼の光も強く生まれついたかわりに、白粉一つ附けたこともなくてせっせと台所に働いているような相生町の家のかみさん」としてお隅は紹介されている。

お隅は、維新後に半蔵が天皇への直訴で牢に入れられても、「あの青山さんのことですもの。何か考えがあって為たことですよ」（第2部第12章）とあくまで半蔵を信頼している。時代の動乱にも揺らぐことのない社会観と人間観を保持している女性である。

3人目は、万福寺の松雲和尚である。若き日に雲水として禅の修業を各地で行った松雲は、優れた僧侶であった。馬籠で住職となり20年を閲している。平田国学に凝り固まった半蔵は、万福寺から祖先の位牌を撤去しようとする。そもそも万福寺は、半蔵の先祖が建立した寺なのだが。半蔵の突然の申し出に驚くが、松雲和尚は次のように穏やかな返事をする。

いや、御趣旨のほどは解りました。よく解りました。わたしは他の僧家とも違いまして、神道を基とするのが自分の本意ですから、すこしもこれに異論はありません。これと申すも皆、前世の悪報です。止むを得ないことです。（第2部第10章）

このように半蔵の無茶な申し出も平然と受ける松雲和尚の態度も、仏教のみを絶対の真理としない独自の宗教観に基づいている。「もとより神仏を敬する法は、みな報恩と謝徳とを以てする。これを信心と言う。自分の

身に利得を求めようとするのは、皆欲情である。報恩謝徳の厚志があらば、神明の加護もあろう。仏といえども、道理に違うことのあるべきはずがない。自分らには現世を安穩にする欲情もなければ、後世に善処する欲情もない。天賦の身は天に任せ、正を行い邪に組せず、現世後世は敵なく、神理を常として真心を尽すを楽しみとするのみ」が「松雲和尚の包み隠しのないところであった」とその信仰がまとめられている。神仏、そして人々への感謝を忘れずに欲望に流されないように身を律していけば、表面的な信仰の違いは意味を持たなくなる。松雲和尚のこのような宗教観は、日本的な「寛容論」と呼ぶことができるであろう。

激動の時代に共振して精神の動揺を繰り返す半蔵も、寿平次や松雲和尚のように激動期でも座標軸がぶれない人物を常に意識している。例えば、先に述べた戸長免職を言い渡された後、呆然とした半蔵が真っ先に思うのは、寿平次や松雲和尚のことである。

彼（半蔵）は言ってみた。

「相変わらず、寿平次さんは高見の見物だろうか。」

彼の心はまた、村の万福寺の松雲和尚の方へも行った。

「和尚さまと来たら、用はないと言うそうな。」（第2部第8章）

心が動揺する時に半蔵が思い出すのは、いかなる状況でもふたりの動じない態度である。もっとも、自分はふたりとは違うということを鋭く意識しながらであるが。

6. 日本の進路にとっての「開国」の重要性

『夜明け前』には藤村の肉声を感じられる部分が見られる。トルストイの大河小説『戦争と平和』でも作者の肉声が聞こえる箇所が多い。よく知られているように、それらの肉声はトルストイ独自の「歴史哲学」と呼ぶべきものである。要約して言うなら、それぞれの国には風土に根ざした歴

史の摂理があり、それを体現しているのは王などの権力者ではなく、農民などの民衆である、という考え方である。したがって、ロシアの風土、歴史を無視して荒々しく侵入したナポレオンが、ロシアの歴史の摂理、その体現者としての民衆を知り尽くしているクトゥゾフ將軍に敗北するのは必然である。このようなトルストイの歴史観がいろいろな場面で、しかも長々と開陳されるので、読者はいささか閉口してしまうことになる。

『夜明け前』で聞こえる藤村の肉声も歴史に関わる発言である。それもテーマが明治維新であるだけに、鎖国から開国へと大転換をする日本の近代化、すなわち諸外国との関係についての発言である。

もし当時のいわゆる黒船、あるいは唐人船が、日本の白旗をこの国の海岸に残して置いて行くような人を乗せて来なかったなら。もしその黒船が力に訴えても開国を促そうとするような人でなしに、真に平和修好の使節を乗せて来たなら。古来この国に住むものは、そう異邦から渡って来た人たちを毛嫌いする民族でもなかった。むしろそれらの人たちを歓び迎えた早い歴史さえ持っていた。（中略）不幸にも、欧羅巴人は世界に互っての土地征服者として、先ずこの島国の人の眼に映った。（第1部第3章）

あるいは、ケンペルの日本旅行記について次のように説明している

彼（ケンペル）の眼に映った日本人は義烈で勇猛な性質がある。多くの人に知られないような神仏の如きもなおかつ軽んずることをしない。しかも一度それを信奉した上は、頑としてその誓いを変えないほどの高慢さだ。もしそれこの高慢と闘争を好むの性癖を除いたら、則ち温和伶俐で、好奇心に富んでいることもその比を見ない。日本人は衷心に於いては外国との通商交易を望み、中にも欧羅巴の学術工芸を習得したいと欲しているが、ただ自分ら（ケンペルたち）を商賈に過

ぎないとし、最下等の人民として軽んじているのである。（第2部第1章）

このように藤村は、元々日本人に外国人排斥の気持ちはなく、むしろ歓迎する気持ちがあったのだが、外国人が世界を植民地化しようとしたから国を閉ざそうとした、と説明する。日本人は本心では外国と交易して外国の文明を学びたいと考えてきたのである。幕末の場合には、開国は黒船という外圧による選択ではあったが、日本人も長年望んでいた外国文明に開かれた日本になるための良い機会だったといえる。

このような藤村の肉声の部分は、実は寿平次の言っていることと同じである。すなわち、寿平次は藤村の作中での代弁者でもあったのだ。藤村の肉声を聞くと、『夜明け前』の執筆意図が読み取れるように思える。すなわち、明治維新の開国と執筆時の昭和日本の排外主義、鎖国主義とを暗黙のうちに対比して、英米など外国敵視を止め世界に開かれた国である日本の復活を求めることが、藤村がこの小説を書いた意図であることがわかる。

Ⅱ 中里介山『大菩薩峠』——明治維新の解体——

一通りでも通読するのに苦労する『大菩薩峠』は、最長の日本近代小説と言われることがある。実際には山岡荘八の『徳川家康』の方が長いそうである。それにしても、明治維新をテーマとしたこの「大衆小説」は、なぜこのように長大な作品になってしまったのか、その理由を探るために、まず作者である中里介山の生涯を見てみよう。

1. 中里介山の生涯

中里介山は、明治17年（1885年）に当時の神奈川県西多摩村羽村に生まれ、第2次世界大戦中の昭和19年（1944年）に亡くなっている。生家はそれなりの農家であったが、没落し、介山も早くから働かねばならなかった。若

き介山は西洋文明の入口でもあったキリスト教に関心を持ち、一方で社会主義にも興味を持った。

東京に出て、幸徳秋水と知り合い、「平民新聞」に日露戦争を批判した詩を書き、反戦詩人として知られるようになる。他方、トルストイの影響を受け、内村鑑三のもとに通ったりもした。結局、介山は社会主義と決別して、幸徳らと縁を切る。その理由として介山があげたのは、トルストイの人道主義は生ぬるいとする「平民新聞」の批判に対するトルストイの回答である。トルストイは、社会主義は物質面の満足を目標にするにすぎず、人間の精神の変革にはならない、と持論を述べた。トルストイの見解に、もともと宗教的関心の強かった介山が共感したのが、社会主義との決別のきっかけであった。

しかし、1910年に「大逆事件」が政府によりでっちあげられ、秋水ら知人が処刑されたことは、介山にとって大きな衝撃であった。介山は政治の暗雲を避けるかのようにして羽村で塾を興し、郷土の青年の教育に当たった。その一方で、『大菩薩峠』を1914年から1941年まで書き継いでいった。介山の作家としての反骨を示すのは、軍国主義の時代に日本文学報国会への加入を断ったエピソードである。当時は生活のために多くのプロレタリア作家までもが入会せざるをえなかったにもかかわらず、「自分は作品により報国をしている」と介山はきっぱりと加入を断っている。

2. 明治維新の解体

『大菩薩峠』は明治維新をテーマとし、原稿用紙で2万枚にも及ぶ。しかも作者の死亡のために未完で終わってしまった。なぜ『大菩薩峠』はこれほどまでに長大な小説になったのであろうか。その理由は、私見によれば明らかである。これだけ長い小説なのに、この小説は明治維新が訪れる前のところで未完のまま終わってしまうのである。なぜ、これほど書いても明治維新は訪れないのか、それは明らかであろう。作者介山が明治維新を完成させたくなかったからである。なぜ、完成させたくなかったのか、

明治維新が訪れたならば、日清・日露のふたつの戦争、さらには大逆事件という大冤罪事件までがずるずると芋づる式に起こってしまう。そのような負の連鎖を生む明治維新の完成を介山は描きたくなかったのである。そのことを介山が意識していたか否かは別にして、『大菩薩峠』は明治維新の到来がないままで未完で終わってしまう。

『大菩薩峠』の冒頭は、主人公の机龍之介が大菩薩峠で巡礼の老人をなんの理由もなく斬り捨てるという有名な場面である。その後、武州御岳山の奉納試合で倒した相手の許嫁を奪って江戸へ逃げる。このあたりまでは大衆小説の王道を行くが、そのような部分は長大なこの大河小説のごく一部でしかない。話はどんどん脇道に入り込み、そのうち主筋がどれで脇筋がどれかが区別できないようになっていく。介山は行き当たりばつりに書いているようにも思える。あるいはそれこそ自らこの作品の趣旨として述べた「人間界の諸相を曲尽して、大乘遊戯の境に参入するカルマ曼荼羅の面影」を写そうとしたのであろうか。しかしそれではあまりに曖昧模糊としている。

それでは、『大菩薩峠』で介山は何を描こうとしたのだろうか。端的に言えば、明治維新そのものの解体である。この未完の大河小説で描かれているのは明治維新に至るまでの時代なのだが、そこで描こうとしているのは明治維新そのものの解体に他ならない。『夜明け前』のテーマについては、「明治維新の批判」であると先に書いた。他方、『大菩薩峠』では、作者介山はそもそも明治維新の前提条件を解体しようと意図しているのである。

その端的な証拠としては、この作品のどこにも明治維新への確固とした視点が見られないことである。それは主人公、机龍之介の造形に明らかである。龍之介は介山同様に多摩の出身という設定から、本来龍之介は佐幕派であるはずなのだが、そこがはっきりしない。龍之介は勤王でもなければ佐幕でもない。近藤勇に親しみを覚える一方で「天忠組」の蜂起にも誘われて参加したりする。しかも、どちらの立場に立つというわけではない。そもそもニヒリストである龍之介は、人間は生きていても死んでも変わり

がない、と思っている。だから、冒頭の大菩薩峠における老巡礼殺しから始まり、次々と無意味な殺人を重ねる。竜之介は天忠組になんとか参加し、爆烈弾によって盲目となる。それ以来、彼自身も生きているのか死んでいるのか分からない亡霊のような存在になってしまう。そのような竜之介にとって日本の最高権威は天皇なのか將軍なのか、と争う勤王・佐幕の主義主張はまるで意味がない。

勤王・佐幕の立場が無意味なだけではなく、そもそも善悪の区別さえも意味がない。例えば、脇役として旗本の神尾主膳が登場するが、彼は度外れた酒乱であり、泥酔すると弱い立場の者をなぶり殺しにするようなひどい悪党である。ところが、作品の終わり近くになると、神尾は妙に真面目になり、勝海舟の父親である小吉の自伝『夢酔独言』を読んで、自分も父親が愛情をかけてくれたり、子どもでもいたらもっとまともな人生を歩めたものを、と恨めしく思ったりする。ある意味で、影が薄くなってしまった竜之介の代わりに、神尾は作品の主人公のような役割さえ果たすのである。他方、人を殺したいという衝動に襲われるとどうしようもなくなる殺人鬼とも呼べる竜之介も、その場の成り行きで人助けをしたりして、結果的に善行を施している。竜之介もまた善悪の彼岸、善悪の区別を超えた面を持っている。

勤王・佐幕の立場から超然とする、善悪の彼岸に立つというのは、言葉で言うと立派に聞こえるが、突き詰めると一種のニヒリズム、世の中のことは自分を含めてどうなってもよい、という自暴自棄の態度につながる危険性がある。そのことを端的に示しているエピソードが丸山勇仙と仏頂寺弥助というふたりの浪士崩れが死ぬ場面である。強い信念のある勤王浪士ではないふたりは、そのいい加減が見透かされ長州を始めたいところから見放され、飛騨から越中に向かう街道で行き場を失ってしまう。ふたりは次のような問答を交わす。

「我々は、どこへ行こうと言って思案するよりは……」

「何の目的で、こうして旅をして歩かなければならないのか」

「それよりはいっそ——何故に我々は生きていなければならぬのか、そいつが先だ」

「むずかしいことになってしまったぞ！」（新月の巻）

このような禅問答のような対話を交わしたあげく、目的もなくうろつくような「亡者として生きるのがいやになった」として、仏頂寺は切腹して死に、丸山も硫酸を呑んで死んでしまう。不条理とも言うべきふたりの死であるが、奇妙なりアリティを感じさせる。勤王だ佐幕だと命をかけている幕末の動乱にできた真空地帯であり、勤王だ佐幕だという「大義」が本当に意味のあることなのかと根底から問いかける役割をふたりの死は果たしている。その証拠に、死ぬ前にふたりは、当時の英傑たちについて問答を交わす。

「高杉晋作は、尊王攘夷のために生きている」

「うむ」

「徳川慶喜は、傾きかけた徳川幕府の屋台骨のために生きなきゃならん」

「うむ」

「西郷吉之助は、薩摩に天下を取らせんがために生きている」

「うむ」

延々と続く以上のような問答の末に、自分たちには生きる意味がないとふたりは自ら納得する。これは生きる「大義」のある英傑たちと、何も無い惨めな自分たちの対比を際立たせる問答であるが、見方を変えれば、英傑たちの生きる「大義」も相対的なものであり、極言すれば幻想にしか過ぎないという批判を含んでいる。だからこそふたりの「犬死」はこの大河小説のなかに埋もれず深く印象に残るのである。

3. 秩序から排除される人々

『大菩薩峠』には、秩序や歴史の流れから排除された人々が多く登場する。それも、単に脇役として登場するのではなく、場面によっては物語の中心人物のような役割も果たす。その端的な例は、伊勢の「間の山」の人々である。彼らは被差別の身分で、竜之介と強い関係を持つお杉、お玉の姉妹や、スーパーヒーローの米友などである。彼らの境遇を示すものとして有名なのは、お玉の歌う「間の山節」である。

「夕べあしたの鐘の音 寂滅為衆と響けども 聞いて驚く人もなし 花は散りても春は 咲く 鳥は古巣に帰れども 往きて帰らぬ 死出の旅」
(間の山の巻)

死すべき運命を定められたすべての人間の虚しさを嘆いている歌詞であるが、そこで歌われているのは、社会の最底辺で生きざるをえない差別される人々の悲しみである。そのような人々にとって勤王だろうと佐幕だろうと何の関係もない。

差別される人々は、この他にも多く登場する。例えば、裏宿の七兵衛である。七兵衛は義賊であり、実在したアウトローである。驚くべきことに、『大菩薩峠』を執筆する際、介山は主人公を裏宿の七兵衛に設定していた、という研究もある。しかし、執筆が進むなかで、本来脇役として設定されていた机竜之介が主人公に変更されたのだという。

差別される第3の人々は、肉体や精神に障がいを持った人々である。代表的人物としては、先に触れた米友である。米友は被差別の出身であり、また足に障がいがある。つまり、二重の意味で差別の対象にされる人物である。しかし、そのような差別をものともしない超人的な槍の名手であり、正義感の塊のような快男児である。米友の活躍により、『大菩薩峠』は陰鬱な因果小説になるのを免れていると言えよう。この他、顔に大火傷を負い、常に顔を隠す頭巾をまとったお銀様も、竜之介との関係においてきわめて重要な役割を果たす。

さて、『大菩薩峠』には、重要なファクターとして群衆が再三登場する。

幕末の騒然とした世情を背景としているだけに、例えば「ええじゃないか」の狂乱のように歴史的事実を下敷きとしているものもあるが、それだけではなく、フィクショナルな群衆の騒動も多く登場する。その際に注目すべきなのは、群衆の騒動が「ええじゃないか」のように歴史を前に進める役割を果たすものとして描かれているだけではなく、反対に少数者排除などの暴動を起こすモップとして描かれている場面もあることだ。群衆のもつこの正負の二面性には、介山が目撃した日比谷公園焼き討ち事件の体験があるとされる。

また、興味深いのは、群衆のなかの「プロ亀」と「デモ倉」が書かれていることである。プロレタリアの亀とデモクラットの倉というわけだが、幕末という時代設定をまったく無視している。群衆の騒動のかけ声は初め「ワッショイ」というお馴染みのものだが、のちに「ファッショ」と変わる。名古屋城下を出立した米友と連れの町医者道庵の前に、砂煙をまいて走り来る一隊がある。

「ファッショ」「ファッショ」「ファッショ」「ファッショ」

はて物々しいと見ていると、今度は後ろ、反対側から同じような砂煙。

「ファッショ」「ファッショ」「ファッショ」「ファッショ」

道庵はこの時ならぬ物々しい前後の物音と掛け声を聞いて変だなと思ったのは、普通、こうして駆けて来るところの一隊の呼び声は、

「ワッショ」「ワッショ」

ということになっている。江戸ではまたワッショを、ワッソワッソワッソワッソとつめることはあるが、ここでは、「ファッショ」「ファッショ」と聞こえる。（弁信の巻）

このかけ声の変化は、大正時代のデモクラシーの要求から昭和初期のファシズム賛美へと変貌する民衆の志向を示していて、介山の同時代認識

を明らかにしている。それにしても幕末の物語に介山の同時代の昭和が勝手に介入しているわけである。

4. 南洋のユートピア

さて、未完の大長編小説『大菩薩峠』の最後はどのように中断されているのだろうか。中断された最後の章は「椰子林の章」と名づけられている。大菩薩峠の山中から南洋の島の椰子林まで大長編は大変転ずる。呆気にとられるほどである。だが、このように南洋のユートピアの孤島で物語が中断することは、介山にとって望んだ結末だったかもしれない。この結末により、介山はもはや明治維新の到来を描く必要はなくなる。その意味で、この南洋の孤島は、『大菩薩峠』の作者介山にとって真の意味でのユートピアであり、明治維新の解体の行き着く先である。

椰子林のユートピアは、理想家の元幕府能吏、駒井能登守が「無名丸」で乗り出し南洋の孤島で創設したユートピアである。ノアの箱舟ならぬ無名丸に雑多な人々を乗せて駒井能登守は太平洋の荒波に乗り出し、20日後に「無名島」に漂着する。ちなみに、その島は駒井の測定によれば、「ハワイ群島はミッドウェイ諸島に近いところ、或いはその中の一部に属しているかも知れません」という位置になる。太平洋戦争の海の主戦場であるハワイとミッドウェイの名があげられ、そこらにある島が駒井のユートピアのありかというのは不気味な暗合である。

駒井は島の観測を終えると船に戻り、乗組員全員につきのように申し渡す。

ここは我々だけの国であり、おたがいだけの社会でありますから、今までの習慣に従う必要もなければ、背くおそれ也没有。もし、この島の生活を好まぬ時は、いつでも退いてよろしい。生活を共にしている間は、相互の約束をそむいてはなりません。ここには法律というものを設けますまい、命令というものを行いますまい、法律を定め

る人と、それを守る人との区別をないように、命令を発する人と、命令を受くる人との差別を認めますまい。（椰子林の巻）

この後も、駒井はこの島には、王者もいないし、治める人と治められる人の区別もない、賞罰もない、刑罰もない、とないものを次々にあげていく。駒井の言葉に込めた介山の意図は、それらすべてを備えている幕末の日本社会、さらに言うならこの章を書いている介山の同時代、太平洋戦争突入前後の日本社会のアンチテーゼとしてのユートピア、アナキズムの社会の提示である。

しかし、注意しなければならないのは、このユートピアがまた恐ろしい負の連鎖のきっかけになり得るという事実である。この大河小説は画家の田山白雲と武闘派の若者柳田平治の次のような対話で終わっている。今後の計画について柳田に聞かれた白雲は答える。

「この無人島が永住の地だとも思っていないよ、ここで足がかりが出来たら、この先の方には大陸があって、そこには日本よりも何倍も開けた国があるのだから、そっちへ行行って、第2の山田長政となることも愉快だと思っている」

「僕も、そういうことを考えています、僕はそんな開けた国よりも野蛮人がウンといるところへ行行って、そいつらをみんな征服して、王になりたいです、こんな無人島では物足りないです」

白雲の話はまだ画家らしい空想の領域と考えられるが、柳田の計画はまさしく日本の権力者、軍部の考えたアジア太平洋戦争のプランに重なる不気味さがある。南洋のユートピアはこのように生臭い不気味さも含んでいるのである。この柳田は駒井始め無名丸の乗組員の誰からも嫌われていて、かろうじて白雲だけが相手をしてやっている、という設定である。ここにも介山の軍部への批判意識の断面を見ることができよう。

Ⅲ 江馬修『山の民』——明治維新における幻のユートピア——

江馬修（修は「なかし」と読む）という作家、またその代表作『山の民』という長編小説は、今ではほとんど忘れられている。しかし、作家の大岡昇平は、『山の民』は『夜明け前』より優れている、と評価している。『山の民』はその名の通り、飛騨高山という山岳地帯を舞台にして、明治維新期の高山の歴史的変動をダイナミックかつ多層的に描き切っている。

大岡昇平の称賛も、飛騨高山の山の民の暮らしを忠実に描いている江馬の姿勢を高く評価したためと思われる。

1. 作者、江馬修（1889-1975）の変転する人生

江馬修は飛騨高山生まれのまさしく「山の民」である。父の弥平は明治維新时期に活躍したが、やがて一家は没落し、修は上京して働くことになる。文学に目覚めて田山花袋門下となるが、夏目漱石門下生とも交流し、白樺派にも接近する。このように文学世界で彷徨を重ね、20代半ばで自伝的長編小説『受難者』を出版したところ、無名作家のこの作品は話題となり、ベストセラーとなる。作家としての地位を確立した修だが、やがて大きな転機が訪れる。1923年の関東大震災である。朝鮮人虐殺を目撃し、大杉栄らの虐殺を知った修は衝撃を受けた。思想の大転換をはかって社会主義者となり、日本プロレタリア作家同盟中央委員になる。マルクス主義の視点から戯曲『阿片戦争』や朝鮮人虐殺のルポルタージュなどを発表するが、当局に弾圧され、高山に帰郷する。戦争中は、警察の監視下で郷土の山村調査などに没頭する。敗戦後、自由な活動ができるようになり、共産党に入党するが、やがて分裂問題で中国派として除名される。まさしく時代の激動に大きく共振した生き方だった。

2. 飛騨の地の暮らしの苛酷さ

『山の民』では、飛騨の地の暮らしの苛酷さが実にリアルに描かれている。暮らしの苛酷さがとりわけ描かれているのは、「ほやを食べる人々」という章である。「ほや」というと仙台などで食べられる海の生物「ホヤ」が有名だが、本来「ほや」とは寄生木のことを指す。海の「ホヤ」が寄生木に外見上似ていたから、「ほや」と名づけられたのである。田畑の少ない飛騨の民は、仕方なく寄生木の「ほや」を煮て食べた。もちろん、作中で言われるように、まともに食べられたものではなかった。それだけ飛騨の民の生活は苦しかったわけである。

そのような貧しい飛騨の民が権力者の横暴に抗して立ち上がったのが、1771年から1788年に起こった「大原騒動」である。これは、幕府直轄の代官である大原親子の苛政に抗し百姓たちが3度にわたって立ち上がった一揆である。隣の青山藩が弾圧に乗り出し、多くの犠牲者を出したものの、最終的には大原家の勢力は一掃された。修は、「大原騒動」の若き指導者を主人公にした『本郷村善九郎』という作品を戦後に書いている。山の民である飛騨の人々には権力の圧制への抵抗心が脈々と息づいていたのである。

このように飢餓と圧政に苦しんできた百姓など山の民にとっては、幕府から朝廷に権力が移ろうともどうでもよいことである。百姓忠七の次の言葉にそれが分かる。「幕府というものは、百姓にとってそう有難いものじゃ無かったのう。まア、正直いやア、天朝でも、幕府でも、よけい百姓をかあいがって下さる方がええのじゃ。みんなの衆、そうでないかやウ」。(第1部「雪崩する国(7)」)

3. 梅村騒動の帰結

明治維新後に県となった高山に、ふたりの県知事が相次いで赴任してくる。初代は、平田派の国学者、竹沢寛三郎である。竹沢は貧しい飛騨の民の暮らしを知り、1年間の年貢半減を約束する。ところが、早急に財政基

盤を固めたい明治政府にとって、そのような税の優遇策はとうてい認められるものではなく、竹沢は更迭されてしまう。人望の厚かった竹沢に代わって知事として赴任したのが元水戸浪人の梅村速水である。飛驒の民に向き合うふたりの為政者の姿勢の違いは次のような対話で明らかになる。梅村は竹沢に年貢半減を約束したのか、と問う。

「御一新の有難み、天朝のお慈悲をみんなに分からせるには、どうしてもこれくらいの思い切った恩恵を与えてやらぬことには、なかなか鎮撫の実効も立ちますまい」

「なるほど、場合によっては百姓どもに飴をしゃぶらせるやり方もありましょう。しかし、そういうやり方だけでは、下々のものをつけ上がらせるばかりで、かえって正しい政治をじゃますることになりはしないかと考えられる。（中略）

われわれは人民一同に御一新の大目的が何であるかを十分に説ききかせて、どんな苦難にもたえて行くようにさせねばならぬ。これこそ目下一番に肝要なことではありますまいか。」（第2部「梅村速水（3）」）

若い梅村は功をあせり、維新の理想を飛驒の地で一刻も早く実現しようとする。郷倉、堤防建設、山方米の廃止、密通の厳罰化、など矢継ぎ早に急進的改革を推し進める。それぞれ、飢饉に備えた米の備蓄、水害の防止、無意味な優遇策の廃止、道義の徹底、と梅村にとっては維新の精神につながる筋を通した政策であった。しかし、飛驒の民にとっては、現地の状況を見殺しした頭でっかちの受け入れがたい施策と思えるのだった。他方、飛驒に根付いていた商人や地役人にとっても、梅村の急進的政策は自分たちの既得権を奪う脅威としか思えない。

こうして、よそ者の梅村知事に対する反対勢力、いわば「反梅村統一戦線」が結成されるようになった。そこに結集したのは、地役人、豪商、地主、農民、火方（火消し）など飛驒の地のほとんどすべての階層の人々だっ

た。梅村が公務のために京都に出張しているすきに、火方や農民たちは竹槍などの武器を手にして、梅村派の役人や商人の家を襲い、殺害したり破壊したりした。その際、梅村派の役人だった修の父親、江馬弥平も襲われたが、九死に一生を得て逃げのびることができた。一揆の騒擾は高山の穏やかな日常を根底から覆す激しさだった。

寺々の鐘と火の見櫓の半鐘は、昼の間もおやみなしに鳴りつづけていた。人々は暴動の恐ろしさに心をうばわれて、それには殆ど耳をとめなかった。しかしふたたび殺気と狂気にみちた暗い夜がやってくると、鐘は新しくよみがえったように高々と鳴りひびき、山々にもものしく反響して、大地まで不安と恐怖におののいているかと思われた。
(第3部「蜂起(28)」)

梅村は一揆勃発を知るや、京都からすぐに飛驒に帰国しようとするが、事態が紛糾することを恐れた維新政府によって、帰国を禁止されてしまう。しかしながら、居ても立ってもいられない心境の梅村は、政府の命令を無視して部下を連れて勝手に帰国してしまう。高山では、梅村の帰国を阻止しようと手に手に武器を持った一揆軍が待ち構えていて、戦闘が始まる。多勢に無勢の梅村軍は、指揮官の梅村が負傷したこともあり、後退して他藩の城に逃げ込む。結局、京都に逃げ帰ることになった梅村は、政府によって命令違反の帰国を断罪され、牢に入れられ、これを恥じた梅村は断食によって獄死する。

梅村の帰国を阻止したことにより、飛驒高山は一種の権力の空白地帯となり、アナーキーな空気が支配し、貧民や火方といった差別された人々が自分たちの存在を誇示するような状況となる。言ってみれば、一瞬のユートピアの出現である。しかしながら、曲がりなりにも秩序が回復すると、反梅村統一戦線は崩壊することになる。豪商や地役人たちは、アナーキーな混乱を生み出したのは自分たちではなく貧民たちで、自分たちはむしろ

秩序を維持することに努めのだ、と強弁して、責任逃れをしようとする。政府も一揆側の分断を図り、豪商や地役人はお咎めなしにして、百姓や火方の指導者15人を逮捕し、京都の獄に送る。百姓指導者の五郎作とその娘と息子の哀切な別れの場面がこの作品の最後になっている。五郎作は別れの言葉を残す。

「これでもおれは、はばかりながら朝廷のお召で京都へ行くんじゃ。願ってもないことよ。おらちゃんを出るとこへ出て、何もかも正直に申しあげるつもりだ。重いおしおきになるならなるでええ。とにかくおれの言い分はひとり聞いてもらわにゃならん。これで人間も、嘘をついたり、ごまかしたりする気があると弱くなるが正直で押しとおす気なら、世の中にはこわいものなんて何にもない。」（第3部「蜂起（35）」）

最後の場面で五郎作のふたりの子どもの「とっつア、いつまでもまめでなア……」という絶叫が高山の陣屋前に響きわたる。『夜明け前』の最後の場面は、座敷牢で狂死した半蔵を葬るために土中をめがけて墓掘り男の打ち込む鋤が谷あいにも重く響く場面で終わる。この鋤の響きと父親を見送る子どもふたりの絶叫で『夜明け前』と『山の民』という山の長編小説は幕を閉じる。その音と声は明治維新の虚妄性に向けられた作家の鋭い視線をこの上なく象徴しているものである。

Ⅳ 山から見る明治維新

以上、明治維新をテーマにした『夜明け前』、『大菩薩峠』、『山の民』の3つの長編小説を足早に見てきた。最初に述べたように、これらの3作品はそれぞれ基本構造に違いがあり、扱う時代にも違いがある。また、明治維新に対する姿勢も、明治維新の批判、明治維新の解体、一瞬のユートピ

アとしての明治維新、とこれも違っている。ただ、共通しているところもある。それは、西洋列強に並ぶ近代化のきっかけとなった明治維新、という成功神話に対する批判的な姿勢である。それはつまり、天皇を錦の御旗にした薩長藩閥政府とは異なる山の庶民の目から見たら、明治維新はどのように見えるのか、という問題意識である。島崎藤村、中里介山、江馬修が生きた明治から大正、昭和という時代の変遷をアジア・太平洋戦争へ向かう暗流と考えたとき、明治維新を成功神話として単純にとらえることができないことに気づかざるを得ない。

柄谷行人は『世界史の実験』（岩波新書）のなかで、『夜明け前』と柳田国夫『遠野物語』を比較検討し、その際に藤村の父親と柳田の父親が同じように平田国学の信奉者であったことに注目している。その上で以下のような視点を提起する。先に見たように、藤村の父親正樹は明治維新が「古代の復興」でないことに幻滅して狂気に陥ったが、柳田の父親も狂気にこそ陥らないものの、同じように明治維新後の現状に幻滅している。藤村は父親の希望とは逆に英学を学んだが、年齢を経るにつれて罪の意識とともに父親の挫折の生涯に関心を抱くようになる。柳田も、官僚としてエリートコースを歩むが、父親の挫折の生涯を意識して、日本列島に生きる常民の暮らしに関心を抱き、民俗学の創始者となる。父親への藤村と柳田の関心の深まりは、裏返せば父親の「夢」を裏切った明治維新への懐疑につながる。こうして、藤村が『夜明け前』において馬籠という父親の生きた山の世界を描いたこと、柳田が遠野という山里の民俗に深い関心を持ったことに共通する理由が明らかになる。

『遠野物語』の「序文」で柳田は次のように書いている。

「願わくば里人をして恐懼せしめんことを」

柳田はなぜ、このような言葉を書いたのだろうか。享楽を尽くす東京など大都会の住民に対する批判意識のせいなのか、あるいは貧窮のなかで苦しい暮らしを送っている東北の山人たちに対する同情のせいなのか。しかしまた、違った解釈もあり得るだろう。東京人など里人たちは明治維新後、

明治国家の枠組みで画一的な思考しかできないようになってしまった。その反面、画一化された「里人」に対してまったく異なる思考をする人々、すなわち自由な「山人」がいるのではないか、という問題提起を柳田はしたいと思ったであろう。柄谷によれば、日本列島には先住民というべき山人がいた、という固定観念が柳田には抜きがたくあった。そのような固定観念は当時の学問から完全に否定されている。にもかかわらずなぜそのような固定観念を柳田が持っていたのかといえば、明治維新以降の画一的な思考、天皇を頂点とする固定的な思考が里人に根強く定着している、そのことにより日本は針路を誤る可能性があるという危機意識があったからであろう。他方、そういった画一的な思考とはまったく異なる自由な民、山人が古代の日本にはいたのだ、これは柳田の一種のユートピア願望であり、柳田にとっての「南洋の椰子林」である。明治維新後の画一的な思考法に対するアンチテーゼという意味では、藤村が『夜明け前』を書いたのと同じ意図を柳田も持っていたのである。『夜明け前』、『大菩薩峠』、『山の民』は形式や対象とする時代は異なるものの、いずれも山の民の視点から明治維新という「成功物語」に異議を唱え、維新後からアジア・太平洋戦争への日本の進路に警鐘を鳴らす作品であった。

テキスト

島崎藤村『夜明け前』（岩波文庫）

中里介山『大菩薩峠』（ちくま文庫）

江馬修『山の民』（春秋社）

本稿は2019年4月20日に開催された世界文学会連続研究会での口頭発表を修正し、書き加えたものである。

廣岡守穂さんとは同年齢ですが、専攻分野が政治学と文学で異なっていたので、敬意をもって眺める畑違いの耕作者と考えてきました。ところがこのところ廣岡さんはこちらにも耕作の手を伸ばしてきて、文学評論、詩作、小説執筆とあれよあれよという間に耕作地をこちらでもどんどん広げています。「誰だ花園を荒らす者は」（中村武羅夫）と言いたいときもありましたが、その耕作法から学ぶこともたくさんありました。要するに、文学を閉ざされた専門家の世界から解き放ち、もっと広い視野から創作し、批評し、研究すべきである、ということが廣岡さんの主張であり、この点には大いに共感するところです。退職後は同じ畑を耕すよきライバルとしてそれぞれなりの良き実りを目指したいものです。Il faut cultiver notre jardin!

（本学法学部教授）